

今日の福音のイエスさまのお話はわたしたちを当惑させます。イエスさまはこのようなお話をすることによって、どういうことをわたしたちに教えようとなさっておられるのか、聴いただけではすぐには分かりにくいからです。お話の全体もそうですが、特に、わたしたちをつまずかせるのは、このお話の中の管理人がしたことがどうして主人にほめられることになるのか、わたしたちにはなかなか納得しにくいからです。今日の福音のお話は、不正な管理人のたとえ話というふうに言われていますが、今日のお話に限らず、イエスさまが語られた、いわゆる、たとえばなしは、どれも、それを聴いただけでは、そのようなお話をすることによって、イエスさまは何を言おうとされているのか、すぐには分かりにくいという特徴を持っています。イエスさまはわざとこのような話し方をされたと考えるべきかもしれません。聖書の中のたとえ話という言い方には、なぞなぞの「なぞ」という意味もあります。イエスさまはこのようなお話し方をされることによって、子供たちがなぞなぞ遊びをするように、イエスさまがこのお話で何を言おうとしておられるのか、わたしたちに考えてみるように誘っておられるのだとも言えます。そうすることで、よりいっそう注意深くイエスさまのお話を受け止めるようにと、イエスさまはそのおことばを聴くわたしたちをご自分に引き付けようとされているのです。

なぞなぞの「なぞ」を解く鍵は、その話を何度もよく考えてみる必要がありますが、それだけではなく、その「なぞ」を出した人がどんな人で、その人は普段どんなことを考えている人なのか、どんなことに興味を持っており、どんなことを大切にしている人なのかを考えてみる必要があります。普段子供たちとあまり接したことがない大人たちよりも、子供たち同士のほうが、友だちが出すなぞに答えることが出来るのはそのためです。イエスさまのたとえ話のなぞを解くためにも、イエスさまとの親しさが必要になると言えるのではないかと思います。

今日のイエスさまのお話に戻って考えてみると、わたしたちが一番疑問に思う点は、管理人は主人に負債のある人たちの借金を勝手に減額してやったのに、どうして、彼の主人はそのことを咎めないだけではなく、彼がしたことをほめたのかということです。この管理人がしたことは、わたしたちの基準では、立派な背任行為です。彼が不正な管理人と呼ばれるのはそのためです。けれども、イエスさまは、この管理人の主人は彼のその抜け目のないやり方を、その意図

にもかかわらず、ほめたと言われているのです。なぜ、イエスさまはこのようなお話をしたのか、それを理解するためには、ルカ福音書でこのお話の直前に語られている、放蕩息子のお話を思い出してみるのがよいかもしれません。放蕩息子のお話で、わたしたちが一番引っかかる点は、父親からせしめた遺産の全てを使い果たして戻ってきた息子を、父親があのように迎え入れたということです。あのお話で、イエスさまが語ろうとしておられるのは、わたしたちに対する父なる神の、わたしたちの責任を問おうとはなさらない、大いなる憐れみに満ちた愛です。放蕩息子に求められていることは、ただ自分が陥った悲惨な状態に気づいて、父の家に戻るだけです。同じように今日のお話でも、管理人が主人にその不正を咎められないだけでなく、むしろほめられているのは、まだ管理人としての権限があるうちに、それを賢く用いて、負債のある人たちの借金を減額してやったからです。そのことで主人が受けることになる損害は、わたしたちの考えを越えて、問題とはされないばかりか、むしろ、管理人がしたことは賞賛されているのです。わたしたちすべての者の主人である神は、わたしたちにもそのように振舞うことを望んでおられるのです。

イエスさまのこのようなお考えの背景には、わたしたちが持っているものの全ては、本来、神様からわたしたちにその管理がゆだねられたものであり、わたしたちに問われることは、それを如何に用いるかということだということです。

イエスさまが語られた、わたしたちに馴染み深いタラントンやムナのたとえ話、あるいは、主人の留守を任されたしもべのたとえ話を思い出してみたらよいかもしれません。そこでも、イエスさまは同じことを語られています。

そのような視点に立って、今日の福音の中で、イエスさまはわたしたちが生きてゆく上でなくてはならないもの、富とか財、イエスさまのお考えに従えば、わたしたちの主人である神様からわたしたちにその管理がゆだねられているそれら一切に対して、どのような態度を取るべきかを教えておられるのです。一言で言うなら、あなたが所有しているものは、本来、神からあなたにその管理を委ねられたものなのだから、あなたがあなたの主人である神の愛の心が分かるなら、それをを用いて、負債のある人の負債を許してあげなさい。助けることのできる貧しい人を助けてあげなさいということです。

このような具体的なことがらに対する指示は、この世の生活を生きるわたしたちには、具体的過ぎて、ただちに従いがたいところがあるのも事実です。けれども、イエスさまがわたしたちに語ってくださったことの全て、イエスさまが約束してくださることの全ては、なぞなぞの謎を解くように、単なる頭の中の理解にとどめるだけでは十分ではありません。そこに自分の生きる道を見出し、それに従うことをイエスさまは求めておられるのです。身を切られる

ような思いの中で、金銭に象徴されるこの世のものへの執着心から解き放たれて、イエスさまが求められたように、わたしたちの側にとともに生きる貧しい人々への配慮を忘れないことが、わたしたちの信仰を地に足の着いたものとし、実質的に信仰を生きる道を開くことになるのです。

なぞなぞ遊びの一番の魅力は、正しい答えを思いつくことだけにあるわけではありません。なぞを出した相手が「正解！」と言って喜んでくれることがみんなの喜びとなるのです。その喜びの中で、謎を共有した皆が仲間になること出来るのです。イエスさまはそんな仲間を求めて、たとえ話を語っておられるのです。イエスさまの弟子となるということは、そのようなイエスさまの仲間となることです。

この世の目先の損得だけに囚われて生きてはならない。それも確かに重要だが、それに足を取られてはならない。あなたがたはそれよりも価値のある者、父なる神の愛のうちに生き、その愛のうちに最終的な永遠のいのちへと呼ばれている者たちである。今日の福音全体を通して、イエスさまが示してくださったこれら全てのことを受け入れ、それに従って生きるために、その足固めのためにも、わたしたちの日頃の具体的な生活目標を再検討しなければならないと思います。イエスさまのたとえ話に込められている謎に対する真の正解は、わたしたちのこの世の生き方のその先にあるのです。

そのためにも、今日の福音の最後のおことば、「あなたがたは神と富とに仕えることはできない」とのきびしいおことばの前に頭をたれ、このおことばがわたしたちのありようを解き放つ、真の福音のおことばとなるよう、このミサで祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高